

ファド、世界の音楽

について



ファド、世界の音楽

ショール、ギター、声、そしてあふれる思い。ポルトガルのシンボルとして認められているこのシンプルなイメージは、ポルトガルの世界の音楽であるファドを表現することができます。

その本質において、それは感情、失恋、去った誰かへの憧れ、日常生活と征服を歌います。結局のところ、人生の一致と不一致はインスピレーションの永遠のテーマです。歌われるレパートリーに色を与える声のパフォーマンスを何よりも重視するスタイルは、通訳者、ミュージシャン、リスナーの誰をも惹き付けます。

彼らは、ファドはファドであると言います。それはポルトガル人の魂の中から来ており、分け隔てはありません。それでも、プロとアマチュアを分け隔てるリスクを冒す人がいます。プロによるファドは、声を生き様にする人々によって歌われます。ノスタルジックな性質は同じですが、ヴァディオ (vadio))としても知られるアマチュアによるファドには、別の特徴があります。繰り返しますが、リスボンの労働者階級の地区に登場するファドの歌手は決して招待されていません...彼らは彼ら自身を招待し、確立されたレパートリーを持っていません。

この自発性は19世紀半ばにまでさかのぼります。ファドの始まりは、社会の底辺が出入りする環境での破戒に基づいていました。ファドの歴史の中で最も有名な物語が生まれたのはこの段階で、ヴィミオーゾ (Vimioso) 伯爵と当時の有名な歌手であるマリア・セヴェーラ・オノフリアーナ (Maria Severa Onofriana, 1820-1846) との関係についてです。このカップルは、今日までさまざまなメディアで取り上げられてきた有名な小説 (A Severa, 1901) のモデルでした。

ファド・ハウスは、1930年代以降、リスボンの歴史的地区、主にパイロ・アルト (Bairro Alto) に集中していました。それ以来、このまさにポルトガルといえる音楽ジャンルの評判は高まり、ファドの権威的な人物であるアマリア・ロドリゲス (Amália Rodrigues) の名声が固まったのは1950年代でした。

頑に沈黙することを拒否した歌は、大衆の関心が変わりつつあった1980年代に国の遺産として公共の場で日の目を見ました。2011年、首都と国のアイデンティティ・シンボルであるファドは、ユネスコによって世界遺産に分類されました。

この世界にどっぷり浸かるには、リスボンの象徴的で抵抗のある歴史的地区であるアルファマ (Alfama) にあるファド博物館を訪れるのに勝るものはありません。何百もの寄付の膨大なコレクションから、19世紀の第1四半期から現在までのファドの歴史を発見することができます。また、リスボンのマドラゴア (Madragoa) 近くには、1999年に亡くなった偉大なアマリアが住んでいた家があり、現在は博物館になっています。ファド歌手の中で最もカリスマ的なのは、ここに彼女の最後の葬辞があることです。ショールで飾られたクラシックな黒のドレスをファド歌手のトレードマークのイメージにしたのは彼女のおかげです。

ファドの歌声

ファドの歌手を選ぶのはいつも難しい仕事です。というのも、ファドはさまざまな方法で歌うことができるからです。

伝統的な歌い方は、アマリア・ロドリゲス (Amália Rodrigues)、エルミニア・シルヴァ (Hermínia Silva)、アルフレード・マルスナイロ (Alfredo Marceneiro)、マリア・ダ・フェ (Maria da Fé)、アルジェンティーナ・サントス (Argentina Santos) などの歌手たちに受け継がれています。ファドに対する情熱で有名な歌手たちばかりです。また、カルロス・ド・カルモ (Carlos do Carmo) は、生まれ故郷のリスボンを歌うときの、心の底からの感情を込めた歌い方が印象的な男性歌手です。

ファド歌手の新しい世代は、新しいアプローチを開拓しながらも、これらの伝統を守っています。そのリストは次のように長くなります。マリーザ (Mariza)、アナ・モウラ (Ana Moura)、カマナー (Camané)、アントニオ・ザンブージョ (António Zambujo)、クーカ・ロゼータ (Cuca Roseta)、ミージア (Mísia)、カルミーニョ (Carminho)、マファルダ・アルナウト (Mafalda Arnauth)、カティア・グレイロ (Katia Guerreiro)、マリア・アナ・ボボン (Mariana Bobone)、マルコ・ロドリゲス (Marco Rodrigues)、ラケル・タヴァレス (Raquel Tavares)、エルデル・モウティニーニョ (Helder Moutinho)、ロドリゴ・コスタ・フェリクス (Rodrigo Costa Felix)、リカルド・リベイロ (Ricardo Ribeiro) などですが、ほかにも大勢の歌手がいます。彼等はファドを、そのフィーリングを損なわずに今日的なものに仕上げました。しかし、いざ選ぶというときには、偏見を持たずに、驚きに身を任せるのが一番でしょう。

グランデ・ノイチ・ド・ファド (Grande Noite do Fado、ファドのグレートナイト) は、1945年以来ほぼ毎年開催されています。最初はリスボンで、1990年代以降はポルトでも。新しい声と有望なアーティストがライブ公演する、特別な夜です。ジュニア、シニア、楽器奏者が競い合い、キャリア賞や啓示賞などの賞が授与されます。

コインブラのファド

コインブラのファド (Fado de Coimbra)

ドは、伝統的に、黒の学生用ガウンと厚いマントを身にまとった男性と大学生によって歌われます。

元々、リスボンのファドに非常によく似た楽器を使っていました。しかし、さまざまな場所で演奏されるにつれ、その歌詞とさまざまな声の効果により、学問的な傾向を帯びるようになりました。ファドは若い時の最高の時間である学生生活の思い出、眠れぬ夜、報われない恋を表現し、セレナーデを歌うための完璧な手段となりました。

5月に行われる学生生活に別れを告げるための祭り、ケイマ・ダス・フィタス (Queima das Fitas) は、ファドを聴く絶好の機会です。また、古い大聖堂の外で行われるセレナーデの夜は (Noite da Serenata)、間違いなく独特な感情が揺さぶられるひと時です。

学生の中には、学問の世界の囲いから抜け出し、ファドを選ぶものもいました。アドリアーノ・コレイア・デ・オリヴェイラ (Adriano Correia de Oliveira) とジョゼ・アフォンソ (José Afonso) は歌手として、アルトゥール・パレーデス (Artur Paredes) とカルロス・パレーデス (Carlos Paredes) はギタリストとして名を馳せました。

ファドを聴きにいく

ギターのチューニングが終わる。照明が落とされる。「静かに、今まさにファドを歌うところだ！」夜はこうして始まります。

幾つかの旅行会社ではファドをテーマに据えたサービス、プログラムや体験などを提供していますが、ファドを聞くならファドハウスが一番です。かなり特殊な雰囲気やくつろげる空間で、言語が分からなくとも理解できる旋律を楽しみながらキャンドルライトのもとで食事をするというのは、ユニークかつ忘れがたい経験となります。

この街はファドの選択肢の数が最大級であり、特に労働者階級の古いエリアは選択肢が多くなっています。ファドが人類の無形文化遺産の登録候補になった際には、リスボン [Lisboa] が推進活動を展開しました。現在では、ファドはポルトガル全国で聞くことができるようになり、特にコインブラ [Coimbra] やポルト [Porto] で盛んです。

ファドが聞ける場所を探すには、メニューの「レストランとカフェ」で fado と入力して検索してください。、または「観光ツアー・その他のサービス」で、絞り込み検索をしてください。